

## 高齢者の生活史との向き合い方：在日コリアン集住地域の事例（2）

### Recognizing the Life History of Elderly People: A Case Study of Japanese Community with many Korean Residents Part 2

金 恵媛\*

Hyeweon KIM

Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

#### 要旨：

本稿では、「川崎在日コリアン生活文化資料館」のコンテンツについて、なかでも聞き書き活動に注目する。コンテンツ全体の構成について概観し、聞き書き活動及び活動参加者の「感想」をみていく。これを通して、高齢者の生活史を他者と共有できるデジタルコンテンツに変換することの意味、多文化共生社会の土台づくりへの影響について考察する。

キーワード：生活史 在日コリアン 多文化共生 世代性 デジタルコンテンツ

#### Abstract:

This paper focuses on life histories of elderly Korean residents in Japan from the "Museum of the lives and cultures of Korean residents in Japan, Kawasaki"<sup>1</sup>, especially the listening and documenting activities corner. It'll outline the full museum contents, and then focus on the meaning of listening and documenting activities and "impressions". It will clarify the meaning of converting the life histories of elderly people into digital contents that can be widely shared with a number of others and its influence on the creation of a multicultural symbiotic society.

Key words : Life history Korean residents in Japan multicultural symbiotic society Generativity  
Digital contents

---

1 「川崎在日コリアン生活文化資料館」の英文表記については、橋本（2008）を参照した。

## 1. はじめに

在日コリアン高齢者（以下、在日高齢者）の生活史については、語りの歴史的、社会的な位置づけとともにその時限性が指摘されることが多い。筆者が川崎市ふれあい館の聞き書き調査（以下、「1998川崎調査」）に参加したのは今から20年あまり前の1998年である。当時も語り手には75歳以上の方が多く、もう少し早くこのような聞き書きが行うべきだったのではと、残念に思ったことを覚えている。

ところで、在日高齢者の語りについては、聞き手や読み手の関わり方、まなざしが典型的なパターンを踏襲しやすいことも指摘できる。すなわち渡日や戦争、貧困、重労働、非識字、そして被差別などに問題関心が偏りがちである。その理由は、在日高齢者が苦難の日々を余儀なくされた状況が、在日コリアンという属性に基づく歴史的、社会的な共通体験として認められるからであろう。在日高齢者の生活史の調査が、彼・彼女らの生活課題を解決するための実態把握の観点から行われることが多いことも背景として考えられる。「1998川崎調査」の結果が川崎の在日高齢者の無年金状況を説明する資料としても活用されたことはその一例であろう。そのため、従来、在日高齢者の生活史との向き合い方は、彼・彼女らの生活実態とその背景を可視化し、福祉ニーズを捉えることに目的をおくものが多かった。



<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/archives/disp05/M0238.html>

一方近年、在日高齢者の語りを世代間連携を補強するための資料として捉える傾向が認められる。「1998川崎調査」でもみられたが、在日コリアンの場合、日本における社会文化的な位置づけ、アイデンティティの問題から、家族、世代間関係に深刻な問題を抱えている状況は決して珍しくない。日本に生まれ、成長した二世以降世代の悩みは、自文化体験をもつ一世のそれとは大きく異なる。在日二世の立ち位置について「『在日一世』が『在日外国人』であったのに対して、

『在日二世』は、『外国人』でもなければ『日本人』でもない」という見解は、在日コリアンの世代間関係の特殊性をよく表している。「ここに収録されている一世たちは、明らかに日本社会における『異物』であったが、現在の三世・四世の在日はもはや言語的、文化的に日系日本人と差異はあまりない。（中略）在日六世、七世は存在しうるのか」と指摘されるように、アイデンティティの基盤状況は世代間に大きな差異がみられる。地域コミュニティにおける共生を目指して活動を行っている川崎市ふれあい館の元職員のMさんも「一世はキムチが好きアヒルが好きと日本人との違いがはっきりぐっきりみえるけど、二世・三世となると一世とは違って文化的には日本人に近いから〔ニーズが〕見えてこない」と、在日コリアンの二世が抱える問題のわかりにくさ、それ故の深刻さについて指摘する<sup>5</sup>。高齢期の発達課題になりつつある世代性の観点からすると、在日高齢者の生活史の可視化は、在日一世の生活改善より、在日二世以降の世代が自分と向き合うために必要な活動だといえる<sup>6</sup>。

「高齢者の生活史との向き合い方：在日コリアン集住地域の事例（1）」（金、2017）では「川崎在日コリアン生活文化資料館」（以下、「川崎在日資料館」）の開設に至るまでの地域共生活動、在日高齢者を中心とする地域活動に注目した。青丘社及び川崎市ふれあい館の誕生、識字学級から「ドラヂの会」に至るまで、地域コミュニティ、日常生活場面での共生を目指す活動が続いた。これらの活動が、在日コリアンと日本人が地域住民として相互に認め合う土台となり、「川崎在日資料館」の誕生に至ったと考える。

以下、「川崎在日資料館」のコンテンツ構成、在日高齢者の生活史の展示状況注目する。なかでも、聞き書き活動に参加した聞き手による「感想」を取り挙げ、在日高齢者の生活史をデジタルコンテンツに変換する意義について考察する。

## 2. 「川崎在日コリアン生活文化資料館」の構成

「川崎在日資料館」は2006年に開設された。そのトップページにはこれまでの活動写真とともに「川崎在日資料館」の開設目的を明記した「はじめに」が掲

1 大阪の在日高齢者の生活構造、経済状況、社会保障・福祉サービスの適用状況などに関する調査結果をまとめた『高齢在日韓国・朝鮮人——大阪における「在日」の生活構造と高齢福祉の課題』（庄谷 怜子・中山 徹、御茶ノ水書房、1997年）は代表的な例として挙げられる。

2 小熊・高・高編(2016:4)。

3 小熊・姜編(2008:779-780)。

4 引用文における〔 〕は筆者による補足である。以下同じ。

5 2016年6月3日、川崎市で筆者によるMさんへのインタビュー。

6 中年期から高齢期の重要な発達課題としての広がりを持つ世代性については田淵（2010）を参照されたい。

載されている。「コミュニティの崩壊は、子育てと高齢者の暮らしを最も直撃します。在日3世4世5世が自分らしく生き、韓国・朝鮮に帰らない、帰れない在日高齢者が、老いの今を豊かに生きるために、私たちはこの生活文化資料館サイトで、多くの方々と現代史、現代文化、川崎南部の地域文化を共有、共感したいと思ひます。あなたも、私たちの歩みの仲間として参加してください。」と、川崎南部の在日コリアンの集住地域として形成されてきた街の歩みをふり返る。そして、今後のあり方として、民族や世代を超え、異なる価値観を認め合うコミュニティづくりを志向する。

<トップページ：「はじめに」>



<http://www.halmoni-haraboji.net/>

活動を映した写真からは、川崎市ふれあい館が中心になって進めてきた多様な地域活動の様子がよくわかる。日本人と在日コリアンがコミュニティ構成員として、日常生活場面での共生に向けて継続的に取り組んだ日々の記録である。これまでの実践活動からの学びとして、地域史の観点から在日コリアンの生活史を見つめ直すこと、在日高齢者の記憶を記録として残していくことの重要性を指摘し、活動への共感・協働を呼び掛ける。「川崎在日資料館」に多文化共生活動のベースキャンプとしての役割が託される背景である。これまでのコミュニティ活動での実践力、信頼関係が「川崎在日資料館」運営の原動力になっていることはいうまでもない。

「川崎在日資料館」のトップページの「資料館入口」をクリックすると「総合展示案内」のページに切り替わる。資料館全体としては5つの主展示コーナーが設けられている。順にみていくと、1Fの「主展

<総合展示案内のページ>



<http://www.halmoni-haraboji.net/index2.html>

示)の「◇私たちの街へようこそ」には日本語と韓国語による街の紹介、マップが掲載されている。工業団地の近くに位置する在日コリアンの集住地域であることから、長年、公害問題の改善と多文化理解の推進に取り組んできた地域のあゆみが描かれている。「◇川崎のハルモニ・ハラボジ」には、在日高齢者の渡日経緯、川崎・周辺地域での定住状況、日本における在日コリアンの生活環境・関連制度の整備過程に注目している。

3Fの「記録展示」コーナーはイベント関連の資料を中心に「◇体験の記録」「◇川崎の街を記録する」という構成となっている。地域行事や地域の変遷過程を示す資料が並ぶが、在日コリアンの生活史を地域史のなかに位置づけ、その可視化を進める必要性を力説しているように見受けられる。「◇体験の記録」のコーナーは、キムチづくりや焼肉文化など、在日高齢者の個人的な営みから韓国・朝鮮の社会文化が垣間見えるつくりとなっている。「◇川崎の街を記録する」では、

7 このうち「◇体験の記録」コーナーは、現在、新年のイベント告知のみ掲載されている。その他の体験サイトに飛ぶことができない状況である（2019年1月21日閲覧）。



「地域の共生の歴史と文化を記録する聞き取り事業」の成果を中心に、工業の街、在日コリアンが集住する街として整備されていく戦後の状況を説明する資料・語りを紹介している。当時を知る日本人や在日コリアンの語りとともに、写真資料を多用している。関係者のみならず初めてのサイト訪問者でも街の戦後が概観できるように資料が整っている。多様な視点から地域史を読み解くことができる手がかりとして有効である。このように国籍、職業、性別の多様な属性、立場の関係者の目線から街の戦後を捉えるコンテンツ構成は、地域史が多様な構成員によって形成されるという普遍的な事実を改めて認識させてくれる。さらに、聞き書き活動など、在日高齢者と直接かかわった活動体験のないサイト訪問者にとっても、在日高齢者の語りをより立体的にとらえる手がかりとなる資料といえる。

4Fの「資料室」には、在日コリアンをめぐる主な制度や戦後の街の様子、「トラヂの会」の活動など、在日高齢者のこれまでの物語る資料や写真などが盛りだくさんである。5Fの「事務室」の「◇資料館について」では運営側の「川崎在日資料館」への思いを垣間見ることができる。民族や世代を超えた多文化共生社会づくりにむけて、同時代を生きる「川崎在日資料館」訪問者にも協働を呼びかける内容となっていある。

### 3. 在日高齢者の表現活動

「川崎在日資料館」2Fの「川崎のハルモニ・ハラボジ」には、在日高齢者の生活史を総合的に理解する資料が多様なコーナーに分かれて配置されている。聞き書き活動、識字学級、「トラヂの会」など、「川崎在日資料館」を開設する土台となった活動が揃って展示されている。聞き書きの内容は、通常、語り手の解釈や聞き手との相互作用といった主観的な要素の影響を受けて生成される特徴をもつ。現在に至るまでの在日高齢者の活動を伝える資料が、在日高齢者の語りを読み解くうえで何らかの影響を及ぼすことは言うまでもないだろう。さらに、在日二世以降の生き方、共生のあり方についての示唆も得られる。以下、聞き書き活動については次章に譲り、本章では、在日高齢者のその他の活動について重点的にみていく。

2Fの「◇ハルモニの作文と絵」のコーナーは、在日高齢者の現在の代表的な活動である「ウリハッキョ」（私たちの学校）と「トラヂの会」、「歴史を旅する」が展示の軸となっている。「◇ハルモニの

絵と作文」コーナーには、初めて文字を書くことができるようになった時の感動をつづった文章、識字学級がメインだった在日高齢者の学習活動に絵を描く活動が加わった経緯、これらの学習活動に対する関係者の声などが掲載されている。

識字学級は、「せめて、名前、住所ぐらいは書けるようになりたい」という在日高齢者の言葉がはじまりだったという。事実、「1998川崎調査」の際にも、日本語がわからず、仕事のみならず毎日の生活にも支障をきたし、悔しい思いをさせられたという話が複数の高齢者から語られた。在日高齢者が主な学習者となり、「共同学習者」という位置づけの日本人ボランティアのサポートによって20年余りにわたって運営されてきた。

#### ＜ハルモニたちの文字と絵＞

ハルモニたちが、  
絵を描きはじめた！

ハルモニたちのギャラリー



「ハルモニの作文と絵」

<http://www.harmoni-haraboji.net/exhibit/sikijiclass/etosakubun/index.html>



「ハルモニたちのギャラリー」

<http://www.harmoni-haraboji.net/exhibit/sikijiclass/etosakubun/harumoninoe/slideshow.html>

8 「トラヂの会」については金（2017）を参照されたい。

9 識字学級、「ウリハッキョ」、絵を描く活動については、「ハルモニたちが絵を描くようになったわけ」を参照されたい（<http://www.harmoni-haraboji.net/exhibit/sikijiclass/etosakubun/index.html>）。

ところで近年、多様な国籍、世代からなる新しい日本語学習者の増加した。若い世代が中心となるニューカマーは学習ニーズや習得速度において在日高齢者と異なる。そこで、高齢者のための独自の教室として、2004年4月から「ウリハッキョ」がスタートした。「トラヂの会」と一緒に、「毎週1回火曜日に集まり、日本語学習を少しずつ進めながら、自らの生活史や今の暮らしへの想いを語り・綴ることに力を入れ」る活動へと変わった。2006年7月からは絵を描く活動も加わった。生れて初めて絵具、絵筆を手にとった感動から「私にも絵が描ける」という喜びへ、そして続けて描きたいと、絵を描くことが趣味となったハルモニ達の言葉が紹介されている。展覧会に出かけ、自分たちの作品展も開くなど、学びを楽しむ、趣味として深める、それが生きがいとなっていくプロセスがよくわかる解説と、作品が並ぶ。

絵画教室によって感性を刺激される楽しさはもちろんである。しかし、在日高齢者にとっては新たな自己表現手段を獲得したことであり、特別な意味を持つものと考えられる。多くの在日高齢者は、ほとんどの日本人高齢者にとっては当たり前である文字という表現手段を持ち得ていなかったのである。加齢によって字を書くことがさらに苦手となった彼女らに、絵は自己を表現する重要な手段となり、生きがい感を高める活動となったと見受けられる。<sup>10</sup>

これらの学習活動が日々の生活を豊かにする刺激となっている状況は、在日高齢者と共同学習者の言葉としてつづられている。<sup>11</sup>「ウリハッキョ」における絵画教室の営みは、生涯学習の成功事例としても注目される。また、高齢者が馴染みのない領域に一步足を踏み入れることの難しさと活動から得られる達成感、そして活動を続けるためには、「ウリハッキョ」の共同学習者のような周囲のサポートが重要になるという示唆も得られる。

「◇歴史を旅する」は、在日高齢者が生活した場所を訪れ回想する、また、同じ場所・異なる状況で同時代を経験した人々との出会いを通して自分史をふり返

るフィールドワークの記録である。当該場所での生活経験を語る在日高齢者の回想からは、戦争とその後の混乱期を生き抜いた人びとのたくましさがかえらる。また、在日高齢者が自分の苦難、努力の日々を知っている、評価してくれる他者との出会いを通じて、自分の人生により肯定的になる様子も紹介されている。<sup>12</sup>

#### 4. 聞き書き活動からの学びと共感

聞き書き活動は「世代と民族を結ぶ交流事業」の一つとして2006～2007年に集中して行われた<sup>13</sup>。事業報告には、「在日一世の生活の記憶」を聞き書きする共同体験から得られた「知識」と「感性」が、世代と民族が有機的につながる未来を創る基礎となる、と活動への期待が述べられている。

＜世代間交流事業＞

■ 在日一世からの聞き書き事業

世代と民族を結ぶ柱は、「在日一世の生活の記憶」であり「知識」であり「感性」だと思えます。記憶を再生し、大いに語っていただく活動を2006年、2007年と集中的に実施いたしました。

「ハルモニ方には、まだまだ活躍してもらいますよ」といった私たちの熱い想いが伝わって、思い出すがつらい人も、語るこの意味と、語ったことによる「解放感」を少しでも感じていただけたのではないかとおもいます。

合計30名あまりのハルモニ・ハラボジからお話をお聞きし、それぞれのお話の要点をプロフィールとしてここにご紹介します。

● ミニ生活史  
また以下の方々お話の内容をミニ生活史として、冊子をつくり、同一の内容をWEB版として、ここに掲載いたしました。ぜひ一読ください



見聞ち書ち聞

<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/report/kikigaki/>

聞き書き活動に参加した語り手の様子は2Fの「川崎のハルモニ・ハラボジ」の主展示「◇ハルモニ、ハラボジのみなさん」に収められている。32名の語り手の写真（1名を除く）とプロフィール、語りキー

10 筆者が久しぶりに「トラヂの会」を訪れた際に、知り合いのハルモニ（おばあちゃん）は、初めて絵を描いた体験を嬉しそうに語り、自分の描いた絵ハガキをわざわざ家から取ってきて、自慢げに見せてくれた。絵を描くことが彼女の生きがいになっている様子が、彼女のいきいきとした表情からよく伝わってきた。

11 「川崎在日資料館」の他に、報告書『六人の在日高齢者が自ら綴った自分史 一字一字におもいをこめて』でも確認できる。

12 「在日コリアン一世の労働に学ぶフィールドワーク そのII 沼津、伊豆 湯ヶ島への旅」（2010）、「在日コリアン一世の炭鉱労働を学ぶ 下関・筑豊フィールドワークの旅」（2010）など、自主製作の報告書としてもまとめている。

13 「06年度 世代と民族を結ぶ交流事業報告 2つの事業」（<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/report/kikigaki/>）。

ワードなどが掲載されている。「◇聞き書き一覧」には、聞き書き活動が行われた当日の様子がわかる写真、語り手の渡日から川崎・周辺地域定住に至る移動経路が示されたマップ、インタビューの肉声ファイルがまとめられている。この一覧には、顔写真や渡日経緯、その後の生活状況に至るまで語り手の個人情報が多く含まれている。このことは、識字学級や「トラヂの会」などのこれまでの実践活動を通して、在日高齢者と「川崎在日資料館」側との間に確かな信頼関係が築かれていることを物語っている。

つぎに、特徴的なコンテンツとして聞き手の「感想」に注目したい。「感想」は、聞き手として参加した大学生や教員を中心とする15名のふり返りで構成されている。聞き書き活動体験から得られた知識や感性をまとめたものであり、まさに「世代と民族をつなぐ軸として在日高齢者の生活史に関する知識と感性」（「はじめに」）の具体例が記されているといえる。

「感想」というタイトルからわかるように、生活史を構成する出来事について述べるより、在日高齢者の生き方、聞き手の生活史との向き合い方、フィールドワークや聞き書き活動を通しての気づきと学びなどに関して多く述べられている。

「知識」の観点からは歴史を学ぶ意味、フィールドワークと座学の融合による学習の効果、フィールドワークや語りからの学び、インタビュー場面でのコミュニケーション方法などが主な内容となっている。また、在日コリアンに関する自分のステレオタイプへの気づきについても触れられている。

「在日のおばあちゃんならではのことを聞かなくてはならないような使命感が強かった。」

「韓国の地名もすべて日本〔語〕で言われて驚いた。日本人の中で暮らし、着物を着るのにも抵抗がなかったという。」

「今までの在日一世のイメージとは、自分の運命をなげくようなイメージがあったが、いろんな人生、生き方をあらためて知り、さらに多くのハルモニ、ハラボジの話聞いてみたいと感じた。」

「そこにあるのは、“一世のハルモニ”とひと括

りにはできない、それぞれの人生である。」

在日高齢者と直接対話するなかで、語り手と聞き手の間に相互理解の土台が形成されていく様子がうかがえる。日本社会で長年生活してきた在日コリアンの言語・文化的背景についての理解や、集団のイメージで相手をとらえてしまうリスクにも体験を通じて気づく<sup>15</sup>。

生活史への理解から、地域史、歴史が多様な構成員の日々の営みによって蓄積・構生されることにも改めて気づかされる。多様な視点・学習方法による歴史考察、学び仲間との共同学習によって学びを深めていく必要性について説く意見もあった。

「この聞き書きに参加して、草の根的運動から始めることは非常に重要だと思いました。様々な人が、過去を振り返り、そして現在を見つめて問題を話し合う場があることで、その状況に即した解決策が生まれてくると思いました。」

「ハルモニからお話を聞いたことは、生きることという個人のレベルから歴史や日本社会という社会のレベルまで大きな衝撃と感慨を私に与えてくれた。」

「リアリティを欠く自分の歴史認識。歴史を学ぶとはどういうことなのか、歴史を教えるとはどういうことなのか、いま自分の中で固くしこった部分が溶け始めている。」

「『私は大変だった。』というような言葉を聞いていたら、『やっぱり教科書や本通りの生活だったんだ。』と他人事のように感じていたと思う。逆に、そういう言葉を聞かなかったから『一人の女性の人生』を歴史を交えながら聞くことができたのかもしれないし、『自分がその時代に生まれ、その立場だったら…。』と、人ごとではなく聞き入ることができたのだと思う。」

「感性」の面では、在日高齢者のたくましい生き方や柔軟な考え方に触れ、人生の先輩からの知恵に共感したという内容が多い。

14 「◇聞き書き一覧」 (<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/report/kikigaki/histall.html>)。

15 団塊の世代や高齢者像をめぐっても、集団のイメージにとられるあまり、構成員のもつ個別性、多様性に気づかないリスクが指摘されている。



「いろいろな事情があるとは思いますが、住み着いた先での適応力には驚ろかされた。」

「ハルモニ達は一人一人違ったエピソードを持っていることでしょう。しかし、その中で共通して持っているものが逆境に負けない強さだと思っています。」

「私は生活史を振り返ることで、ハルモニたちの過去—現在を一致させることができた。」

「私たちは学校教育で沢山の知識を学んだが、ハルモニのお話にはご本人が意図されているわけではないが、確固たる人生哲学がある。それが生活にしっかりと密着した飾らないことばで語られるとき、人の心を大きく動かす教えとして、輝やく瞬間がある。」

「人生の先輩として、女性として、見習いたいと思うことがたくさんありました。」

「感想」は、聞き手が語り手の長年にわたる人生経験についての知識と理解、さらには自分の考えと印象を文章にまとめたものである。在日コリアンという属性にとらわれ過ぎない、高齢者と若者の世代間交流、ある人の生活経験について対話し、追体験する活動となっている。語り手の生き方に目を向け、そこからの気づきや印象を述べており、サイト訪問者にとっても理解・共感しやすい内容構成といえる。また、聞き書き活動に参加したことがきっかけとなって聞き手が自分の親子関係を振り返ったり、歴史への新たなアプローチ方法の獲得となったりしている。在日高齢者の語りから自らの苦難の生活史を振り返るにとどまるのではなく、次世代の成長を促すことに貢献している状況が見て取れる。聞き書き活動は、「民族を世代をつなぐ」という「川崎在日資料館」の開設目的を具体的な実践に他ならない。

「川崎在日資料館」はいつでも、どこでもアプローチしやすいデジタル資料館である。コンテンツは活動参加者の枠にとどまらず、広く共有されていく。なかでも「感想」は、生活史を構成する事実（知識）より、生活史との向き合い方（感性）に比重をおくコンテンツといえる。地域コミュニティにおける多文化共生と向き合う際に、多様な観点からの取組みがわかる先行事例として活用できるコンテンツであると考えられる。

## 5. おわりに

地域史のなかに在日コリアンの生活史を位置づけ、民族と世代を超えて共生する街づくりを目指すデジタル博物館の「川崎在日資料館」についてみてきた。在日高齢者の生活史及び街の戦後の歩み、地域コミュニティでの共生を目指して継続的に取り組んでいる実践活動、そして聞き書き活動が主なコンテンツ構成である。

聞き書き活動の聞き手によるふり返りである「感想」からは、聞き書き活動が在日高齢者の生活史への知識と理解を深め、そして共感を広める場となっていることがわかる。傾向としては、在日コリアン特有の事情に着目するより、人生の先輩として在日高齢者を捉える、その生き方に対する共感が多数述べられている。また、歴史と生活史のつながり、地域史への多様な視点、座学とフィールドワークの融合など、在日高齢者の生活史を聞き書きした経験が社会問題への関心、深い学びへと広がる契機となっている様子も見て取れる。

在日高齢者が営んできた生活の記憶を記録に変換する活動を通して、若い世代や問題関心の異なる人びとの接点が補強されたといえる。記録媒体がアクセスしやすいデジタル博物館であることから、サイト訪問者とのコンテンツ共有が簡単にできることは言うまでもない。さらに「感想」は、聞き書き活動参加者の目線から書かれた内容であり、記事の読み手の追体験が容易なコンテンツである。コミュニティの中の多文化・多世代共生を読み解く手がかりとして重要なコンテンツといえる。

## <参考・引用文献>

- 「川崎在日コリアン生活文化資料館」<http://www.halmoni-haraboji.net/>
- 小熊英二・姜尚中編『在日一世の記憶』集英社、2008
- 小熊英二・高賛侑・高秀美編『在日二世の記憶』集英社、2016
- かわさきの在日高齢者と結ぶ2000人ネットワーク「六人の在日高齢者が自ら綴った自分史 一字一字におもいをこめて」、2017
- 金恵媛「高齢者の生活史との向き合い方：在日コリアン集住地域の事例（1）」『山口県立大学学術情報』第10号〔大学院論集 通巻第18号〕、2017、17-22頁
- 小松恵「高齢期における在日コリアンのアイデンティティと生活経験：川崎市ふれあい館の取り組みか

- ら」『社会学研究科年報』（25）、2018、51-60頁
- 高橋 満・石沢 真貴・内藤 隆史「在日韓国・朝鮮人の地域教育運動と社会教育—川崎市『ふれあい館』設立過程の事例—」『東北大学教育学部研究年報』第44集、1996、65-94頁
- 田渕恵「世代性（Generativity）の概念と尺度の変遷」『生老病死の行動科学』（15）2010、13-20頁
- 橋本みゆき「ウェブサイト『川崎在日コリアン生活文化資料館』が展示するもの—歴史を記録する実践の論理—」『多文化多言語—実践と研究』vol.1、2008.3、147-160頁